

# 平成25年度 E幼稚園

研究テーマ

## 一人一人の良さを引き出し、伸ばすための教育活動を推進する

### 1. 課題設定の趣旨

本園は3歳児1クラス、4歳児1クラス、5歳児1クラスの園である。全クラスに発達障がいと診断あるいは疑いのある幼児や、身体障がいがあり支援が必要な幼児など、支援を必要とする園児が3割強をしめている。担任だけでは支援が十分行えない実態があり、園全体での支援の方法を探る。

また、関係諸機関と連携を取りながら、小学校との連携や保護者支援に取り組む。

### 2. 実践・研究の計画、方法

#### (1) 研究計画

月	研究内容
4月	園内委員会の実施（共通理解）
5月	配慮の必要な幼児について、チェックリストを用いて実態把握 個別の教育支援計画、個別の指導計画の作成
6月	巡回相談：具体的支援について検討 個別の支援計画、個別の指導計画の見直し 区特別支援教育コーディネーター連絡協議会で関係小学校との連携
7月	園内委員会の実施。1学期の支援についての評価・反省・見直し。情報交換 2学期の課題についての共通理解
8月	
9月	園内委員会の実施。運動会の参加の仕方を園内で検討、共通理解
10月	
11月	巡回相談：具体的支援について検討
12月	園内委員会の実施。2学期の支援について評価・反省・見直し 3学期の課題について共通理解を図る。
1月	区特別支援教育コーディネーター連絡協議会で関係小学校との連携
2月	小学校との連携（小学校の教頭・特別支援コーディネーター来園） 巡回相談：小学校への引き継ぎについて
3月	小学校との連携（個別の教育支援計画の引継ぎ） 療育施設の見学

(2) 園内委員会では、園長、特別支援教育コーディネーター（主任）・担任・養護教諭・非常勤嘱託員の園全体で構成し取り組んだ。園内委員会では、個々の幼児について共通理解を図り、指導についての検討や保護者支援などについて話し合い、全員が情報を共有化し、園全体で支援の必要な幼児に関わるようにした。

### 3. 実践・研究の内容

#### (1) 5歳児クラスの実践。

5歳児クラスは、A児（自閉症）、B児（知的障がい）、C児（広汎性発達障がいの疑い）、D児（全般的発達の遅れ）の他に、支援の必要な幼児が多数在籍している。一斉指示がとおらず、個別に声かけをしないと活動に入れない幼児が多い。そこで、視覚教材を様々な場面で活用し、自分の力で行動できる支援の方法を工夫していこうと考えた。

ア 日々の保育の中での支援の工夫

- ・話をする教師の周りには、なるべく物が無い状態を維持し、教師に注目できるようにした。
- ・幼児の座る位置を固定化した。6チームを色分けし、グループ化した。固定のグループにすることで、みんなにとって分かりやすく、グループ内で支え合う姿が見られた。
- ・製作活動では、一つ一つの手順を書いた紙を張り出して、それを見ながら製作活動ができるようにした。



製作活動の準備



製作手順

- ・音楽活動では、歌詞カードを見ながら歌う。足型を使用し、立ち位置を明確にするなど幼児に合った個別支援を行った。



個人用歌詞カード



壁面に歌詞を貼り出す

- ・一斉指導の際には、分かりやすい指示を心掛けた。一度に多くの要素を含んだ指示を出すのではなく、細かく指示を区切り1つずつ確認して進めるようにした。

イ 運動会での支援の工夫

- ・座席は1学期から固定している6グループにした。新しい並び順を覚える必要がなく、1学期からのグループ内での教え合いや、支え合いを活かすことができた。
- ・演技の立ち位置に目印を置いた。目印を置くまでは動き回る姿も見られたが、広い広場でも自分の立つ位置を把握し、活動できるようになった。(B児・C児)
- ・玉入れのグループの目印を腕につけることで、自分のチームが分かり、進んで参加できるようになった。(全園児)



立ち位置の目印

- ・左右が分かりやすいよう、ダンスをするときは片手に目印をつけ、そちらから始めるよう

にした。左右が分かりにくい幼児はクラスの中にも多く、目印があることで無理なく取り組めた。

- ・個人用プログラムを渡し、何チームなのか、いつ司会をするのか、どんな準備をして待っておけばよいのかを自分で確認できるようにした。見通しが持てるようになり、進んで用意をし、意欲的に参加できるようになった。  
また、プログラムを拡大したものを当日までは保育室、当日は座席の所に貼り出しておき、常に見通しを持って行動できるようにした。



チームの目印



個人用プログラム



保育室に貼り出した  
プログラム

#### (2) 区役所家庭児童相談室等との連携

区の家庭児童相談室の母子グループに通っている幼児や、相談に行っている保護者も多い。担当の家庭児童相談員とは密に連携をとっている。年数回来園し、園での幼児の様子を観察し、保護者にも適切なアドバイスを行っている。幼稚園と保護者、関係機関が連携を取り合い、幼児を見守る体制ができたことで、保護者にとっての安心感につながった。又、幼児の通っている療育施設の指導員とも連携し、幼児に合った専門的な対応の仕方を学んだ。

#### (3) 区特別支援教育コーディネーター連絡協議会の活用

年3回行われる区特別支援教育コーディネーター連絡協議会に参加した。その場で、進学先の小学校のコーディネーターと直接話をしたことで園訪問が実現した。保護者にも進学小学校と連携していることを知らせ、園での支援を引き継ぐことによって、安心感を与えることができた。不安を持たずに進学できることは、大きな成果であった。

#### 4. 実践・研究のまとめと今後の課題

○1年間、幼稚園全体で取り組んできた結果、次の様な成果と課題があった。

- ・園全体で園内委員会を構成して取り組んだことにより、一人の幼児の実態について、いろいろな見方や意見があることが分かった。話し合い、共通理解をすることで、園全体で幼児を見守り、指導に活かすことができた。また園内委員会の話し合いだけでなく、日常のコミュニケーション、情報共有により、幼児理解を深めることができた。
- ・個別の指導計画の書き方、形式については何度も検討を重ね、幼児の実態に合わせた具体的な指導を記載し、活用しやすい指導計画を作成することができた。
- ・3度の巡回相談では、教師の働きかけ、視覚支援やクラス環境の整備の仕方など、具体的な助言をいただき、指導に活かすことができた。
- ・関係諸機関と連携する中では、幼児だけでなく、保護者への適切なアドバイスを受けた。
- ・支援が必要な幼児に対する環境の工夫や指導は、どの幼児にとっても有効な手立てであった。

教師自身が常にユニバーサルデザインを意識し工夫するようになり、資質の向上につながった。

- 区特別支援教育コーディネーター連絡協議会では、関係小学校の教師と直接話をするのができ、園訪問が実現するなど、とても効果的であった。
- 今後も教職員間の連携と発達障がいへの理解を深め、指導に活かしていきたい。